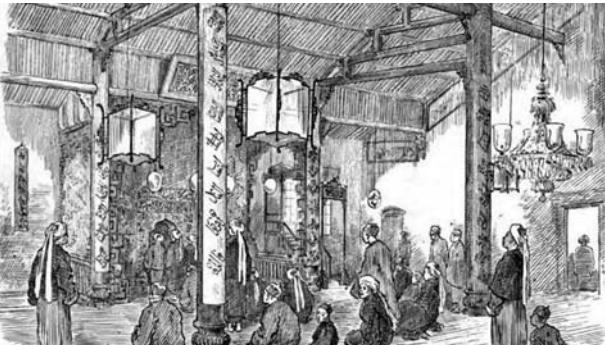


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



SHINSUI LIBRARY 中国回教史論叢 Shinsui LIBRARY Chinsui.com

金吉堂著 中国回教史研究 外務省調査部訳
傳統先著 中国回教史 井東憲訳

書肆心水

中国回教史論叢

目
次

SAMPLE
Shoshi-Sensui.com



金口御著　中國回教史研究

外務省調査部訳

中国回教史研究邦訳序 20

凡例 20

中国回教史研究序 21

序言 23
例言 24

上巻　中国回教史学

第一章　中国回教史上解決すべき諸問題

第一節　回回と回紇の区別 26

A　回々なる名称の源流 28

B　廻紇と回紇、畏兀兒との関係 33

第二節　回教民族説の歴史上の証拠 37

A　姓による証拠 38

B　事実を証拠とする 43

第三節　回教は何時始めて中国に伝來したか 46

A　隋の開皇年間説 46

B　唐の武徳年間説 47

C　貞觀二年説 47

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第二章

中国回教史上の認識すべき各問題

- 第一節 中国歴代の回教徒に対する種々な称謂 54
第二節 重要名詞の同音異訳表 57

- A 中国文献上のアラビヤ語、ペルシヤ語名詞 59
B 外国文中的中国名詞 57

第三節 中国歴代の回教に対する認認 61

第四節 清 真 65

第五節 中国暦と回教暦との不同 66

第三章 中国回教史の構造

第一節 以前の中国回教史に関する著作とその評価 68

第二節 将來の中国回教史の構造 72

第三節 如何にして史料を蒐集するか 76

- A 先決問題 76
B 史料の来原 76
C 捲集方法 79

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

下巻　中国回教史略

第一章　回民の中国史上に於ける留寓時代

- 第一節　回教の中国伝来 82
- 第二節　回教徒商賈東來の道路と東土に於ける発展 83
- 第三節　古代回教商人の中国留寓状態 86
- 第四節　サラセン与中国との政治・外交・軍事等の関係 90
- 第五節　回教徒が中国風俗・制度の上に及ぼせる影響 94

第二章　回民の中国史上に於ける同化時代

- 第一節　蒙古統治下の中国回民の概況 96
- 第二節　元代の回教人物 99
- 第三節　回教徒が中国に伝來した學術 107
- 第四節　明代前期の回教徒概況 110
- 第五節　元明両代の回回發展の趨勢 114

第三章　回民の中国史上に於ける普遍時代

- 第一節　普遍 115
- 第二節　衰落 117

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第三節 清人の回教排斥と康熙・雍正・乾隆三帝の回回に対する態度 121

第四節 清代の回民大事件 126

A 反「清」復「明」の役 126

B 回部の清朝帰属と回疆累次の叛乱 126

C 馬明心の役 130

D 陝・甘・回疆の役 131

E 雲南の役 133

第五節 近代教民の人材と著述 135

第六節 清代の回回 141

引用書目 145

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

傳統先著 中國回教史 井東憲訳

自序 153

第一章 回教とマホメット

- | | |
|-------------|-----|
| 一 回教の起源 | 157 |
| 二 マホメットの経歴 | 158 |
| 三 回教の信仰 | 161 |
| 四 中国回教の一般現象 | 165 |

第二章 回教の中国伝入

- | | |
|---------------------|-----|
| 一 回教入中の年代 | 169 |
| 二 回教の中国に入りし経路 | 176 |
| 三 回教徒の中国儒居の情勢 | 179 |
| 四 回教の入中に対する西方文化上の貢献 | |

180

第三章 宋代の回教

- | | |
|-----------------|-----|
| 一 海上交通の繁昌 | 182 |
| 二 回教徒の香料貿易 | 184 |
| 三 回教徒の富豪 | 187 |
| 四 回教の宋代文化に対する影響 | 191 |
| 五 清真寺の創建 | 192 |

第四章 元代の回教の隆盛

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第六章

- 一 当時の回教徒の概況 252
- 二 清代朝野の回教に対する阻隔 254

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第五章

明代の回教

- 一 回教徒の同化 233
- 二 明代帝王の回教崇拝 234
- 三 明代の回曆 236
- 四 鄭和の西洋行 238
- 五 明代名臣中の回教徒 242
- 六 明代の回教学者 245
- 七 回教の明代芸術上に対する貢献 249
- 八 回教徒の元代文學上の地位 223
- 九 回教徒の元代美術上の貢献 228
- 一〇 元代の回教婦女 231

清代の回教

- 一 回教徒の概況 200
- 二 元代の回教の概況 203
- 三 回教の元代政治に対する影響 205
- 四 元代の重要な長官中の回教徒 208
- 五 回教徒の元代軍事上に対する援助 217
- 六 元代回教徒の商賈の情勢 217
- 七 回教の元代文化に対する貢献 219
- 八 回教徒の元代文學上の地位 223
- 九 回教徒の元代美術上の貢献 228
- 一〇 元代の回教婦女 231

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第七章

三	回教徒の反清の役	261
四	回疆の大小教長の役	261
五	烏什の民變	268
六	張格爾の役	270
七	清廷の回疆に対する東緋政策	275
八	蘭州と石峯堡の役	276
九	陝西、甘肅の役	279
十	同治年間の回疆の役	281
十一	雲南の役	283
十二	清廷に忠義なりし回教武人	286
十三	中国回教の學術	289
中華民国の回教		
一	現在の中国回教の一班	299
二	回教と中国軍事政治の關係	302
三	侮教事件	315
四	中国回教の組織	321
五	中国回教の教育	327
六	コーランの翻訳と中国の回教刊行物	337
七	中国回教の復興	346
参考書		
	348	

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

中国回教史論叢

SAMPLE
Shoshi · G1 · i.com



凡例

一、本書は、金吉堂著『支那回教史』外務省調査部訳、一九四〇年刊（生活社）、傳統先著『支那回教史』井東憲訳、一九四二年刊（岡倉書房）の二著を、活字を組みなおして合冊としたものである。本書では各篇の著作名は訳書名ではなく原書名に戻して表記した。金吉堂著の原書は『中国回教史研究』一九三五年刊（北平成達師範学校出版部）、傳統先著の原書は『中国回教史』一九四〇年刊（永沙商務印書館）である。また、二つの訳書はともに「中國」の訳語として「支那」を用いているが、本書では「中國」に戻して表記した。併せて「入支」などを便宜的に「入中」と表記した。

一、本書では新漢字、新仮名遣いで表記した。異体字関係にある漢字（例、羌／羌）は固有名詞以外もそのまま表記した。

一、送り仮名を現代風に加減し、読み仮名ルビを多少補つた。また、読点を補つたところ、読点を句点に置き換えたところがある。

一、踊り字は「々」以外は使用せず、繰り返す文字に戻して表記した。

一、底本において著作名を括る鍵括弧がある場合とない場合があるが、鍵括弧の有無は底本どおりとし、鍵括弧がある場合は『』で表記した。また、引用部分の改行と鍵括弧の使用を多少調整した。

一、些細な表記の不統一はごく近接する場合でも底本のままに表記した。例、ムファアリ／モファアリ、ウマル／ウマール。

一、正誤を判断しかねる記述には「ママ」とルビ書きした。また、丸括弧の二行割註は本書刊行所による補足である。

一、現今一般に漢字表記が避けられている下記の語を平仮名で表記した。送り仮名と活用語尾は代表例。文脈により漢字のままで表記した場合もある。亞細亞（アジヤ、アジア）、阿刺伯（アラビヤ、アラビア）、雖も（いえども）、英吉利（イギリス）、些か（いさか）、孰れ（いずれ）、苟も（いやしくも）、愈々々（いよいよ）、所謂（いわゆる）、況んや（いわんや）、印度（インド）、埃及（エジプト）、各・各々（おののおの）、開羅（カイロ）、斯る（かかる）、斯く（かく）、曾て・嘗て（かつて）、基督（キリスト）、蓋し（けだし）、茲（こ）、斯う（こう）、此処（此・是・爰）、茲（ここ）、悉く・殫く・尽く（ことごとく）、斯の・是の・此の・之の（この）、是・此・是・之・茲（これ）、曩に（さきに）、扱（さて）、然・而（しか）、屢ば・屢々（しばしば）、姑く（しばらく）、西伯利亞（シベリア）、暹羅（シャム）、頗る（すこぶる）、已に（すでに）、輒ち・曾ち・迺ち・乃ち（すなわち）、須く（すべからく）、其（そ）、其の（その）、抑も・抑々（そもそも）、夫々（それそれ）、度い（たい）、啻に（ただに）、忽ち（たちまち）、仮令（たとい）、適・適々・偶（たまたま）、熟ら（つらつら）、兎も角（ともあれ）、兎も角（ともかく）、土耳其（トルコ）、乃至（ないし）、仍お・尚お・猶お（なお）、乍ら（ながら）、勿れ・母れ（なかれ）、就中（なかんずく）、母し（なし）、為す（なす）、為る（なる）、只管（ひたすら）、緬甸（ビルマ）、可し（べし）、波斯（ペルシャ）、殆んど（ほとんど）、略・略々（ほぼ）、苟に・洵に（まことに）、當さに・応さに（まさに）、復・亦（また）、馬来（マライ）、若し（もし）、齋す（もたらす）、固より（もとより）、艤て（やがて）、耶穌（ヤン）、稍・稍々（やや）、動も（ややも）、猶太（ユダヤ）、纔か（わざか）

金吉堂著
中国回教史研究

外務省調査部訳

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

同相	柱	領首	富	乎合
صَاحِبَةٌ	عَمَادٌ	سَيِّدٌ	عَنْتَجٌ	طَابُقٌ
ئەمان ئۇرۇ	چۈھۈر	شەقلى	قۇزى	ئەنەن

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

回教都市寧夏省省城の大街



SAMPLE
Sh

om



廣東懷聖寺光塔

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



サラル回教徒

SAM
Sho
com



創建清真寺碑（陝西省西安）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



SAMPLE

北京郊外三里河清真寺殿内



北京回回營清真禮拜寺

Shoshi-Shinsui.com



北京天橋清真寺大殿

中国回教史研究邦訳序

中国の回教問題は極めて古いが、しかも又新しい問題であり、最近頓に識者の関心を昂め、喧しく論議せらるるに至つたが、我が国にはこれが正鵠なる理解の基礎たるべき専書を観いた。成程、仏のエム・ティールサン、ヴィシエール、ドロンヌ、エム・ハルトマン、英のブルームホールの諸著には卓れた中国回教に関する専論はあっても、史的に一貫せる系統的な研究は求められず、纏まつたものとしてはわずかに太宰松三郎氏著『中国回教徒の研究』（大正十三年二月刊行、満鉄庶務部調査課）を挙げ得るに過ぎないが、これとても十数年以前の著作となつてゐる。ここに訳出せる河北省通県の人金吉堂の著は素々北平成達師範学校生徒のための講義であり、その細微の点に於いては、史実の解釈に異論あるを免れず、又著者自ら回教徒としての私見を盛るところがある。けれども回教所関の漢籍を旁搜博引し、ほとんど余す所なく、且つ教徒のみ能くし得る点も間々あり、その構想に於いて、単なる教史に止らず、将来の回教史の構造を提示せる点は、示唆する所に富み、本書一部はひとり回教の中国伝来、弘布の史実を稽うる学者のみに止らず、回教徒問題の衝に當る人士の津梁として永く遺るべき好著であると信ずる。これ邦訳上梓して江湖に送る所以である。

昭和十五年六月三十日

凡例

- 一、原著引用文献は務めて原典と対校の上訓読し、著者名、卷数を明示した。
- 一、原著の多数の誤植中、その誤にして明白なるものには、適宜訂正し一々註記しなかつた。
- 一、括弧「」は訳者の施したものである。
- 一、著者と異見ある部分、又は特に詳述すべき部分については、その参考文献を訳註として附記した。
- 一、巻頭の写真は読者の参考に資する為他より蒐輯せるものである。

外務省調査部

中国回教史研究序

わがイスラーム教が中国に伝來してから今日迄すでに千数百年を歴た。その間に経過した史蹟は至つて繁多である。群書に散見し、稽考するに困難ではないけれども、一つの系統ある記載を求めようと欲しても、得ることが出来ない。何と遺憾な事ではないだろうか。先哲前賢の考慮もこれに及ばなかつたのだろうか？ けだし吾人は三教の間に雜居していたので、流俗に濡染し、同化されることをひたすら懼れて兢々として保守し、ただ及ばざらんことを恐れた。すなわち専心力を經籍に致したが遂に史籍を兼ね治むるに暇がなかつた。要はまた今と昔と環境が同じでなし、古人に全責任を帰せしめることは困難である。さきに予は吾が教民中には一行為の則るに足り、一芸の伝うべき者、耳に聞き目に睹るところすこぶる人に乏しくなく、湮没に任せてあるのを大いに惜しむべきこととし、かつて『先止軼事』を編輯したことがある。が卒いに労多くして余暇少きため、志遠ばざるものがあつた。歳月虚しく過ぎ、老大悲しみを生じた。ただこの区々たることなおよく成就しない。もしそれ上下千余年の歴史を蒐集討議編纂することは尤も容易な業ではない。いづくにか有志の士が出でこの重任を負うものがあるだろうか？ 吾が友金吉堂君は年若く志あるの士である。学を好み、深く思い、栄利を慕わず、数年の功を尽くして書籍を参考すること百余種、苦心ひとり進み、『中国回教史研究』なる一書を著した。凡て数万言。一切の盛衰の状況、流行の事蹟を挙げ、考証典拠は精確、信にして徵あり、まことに傑作である。書成つて予に示された。予受けてこれを読み、覚えず喟然と歎して曰く、この物質文明の世に当り、多く功利を競うのに、金君をして多年の苦功を積み、法政の学を研修して科学を研究させるからには、当然相当の収穫がなければならない。少にしては有無を交易しましたしばしば中るに足る。竟いに能く習俗の移る所とならず、風気に拘

束されず、事功を敝履の如くに棄てて教道を恪守し、首を典籍に埋め、著述に従事してこの空前の業を成した。まことに学に篤く、道に契る者でなくては、どうして克くここに至られよう。願くは本書を読む江湖の士が既往の興隆衰亡利病に鑑みて發揚し大いにこれを照し、吾がイスラーム教を世界に燐爛とさせ、金君の苦心に負かざらんことを願う次第である。

中華民国二十四年十二月上浣

北平 伯清、尹広源譲す

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序　言

我国の史籍は浩として広きこと煙海の如く、しかもつねに偏し、周到詳密なること能わざるを患うるものである。中にも元史は倉卒の間に成り、欠如簡略が最も多い。明以後これが補充改作をした者が代々その人に乏しくない。咸豐・同治以来「金元の歴史、西北の地理」が歴史地理に精進する者の一種の風尚となつた。不才以て『元史』を読むに漸く蒙古統治下の回教事情に及び、進んで全体の中国回教の歴史に注意するに至つて始めて史料の欠乏を感じたが、心を留むること日久しきに及んで、その材料の散漫にして直ぐには全豹を窺い尽すことの困難なるを遺憾とした。後業余の暇に探討に従事し、積むこと久しうしてやや獲る所があつた。つねに系統ある著書を作つてこれを江湖に送らんと欲したが又知るところ、見るところと、知らんと欲し、見んと欲した材料とを比較すると、相去る極めて多い。且つ「中国回教史」と云うは、単に回教の歴史自体の問題だけではなく、凡ゆる回教民族形成の源流、回々衰弱の原因、経済地位の沈降、知識上の閉塞、回民叛乱の評価及び如何にして回教が復興の地位に達したかの諸項に及ぶ、みなこの中から、整理して出づべきである。しかしかかる種々のこととはなお回教範囲内の事項に過ぎず、一般学術との関係に至つては早期——唐宋時代——中国に來た回教商人の中国に於ける貿易事情、中国に居留した状況、享受した待遇を研究する、單に中古時代の中国と西方との通商史のみでなく、蒙古が中国を統治した期間、回々が居るところの地位と勢力、回教文明が中国人に与えた影響を蒐集すれば、元史を整理する者の為にその困難を減去することが出来る。又民国が成立してから既に二十五年。一部の清史はなお完成しない。吾人はいやしくも明末以来の回々の人文・大事を探討したならば、将来の清史上に必ずや特に一格を備え得るであろう。然れば中国回教史に含まれる意義もまた大いなるものがある。そ

れかくの如くであるとすれば、どうして卒爾に操帆の従事得る所であろうか。これがため卷に臨んで筆を擱くこと再三に及んだ。本年夏、初め北平成達師範学校の馬松亭阿衡の約束に応じ、中国回教歴史の問題を講演した。阿衡はまた、研究部第一級及び師範部第二級の卒業が間近に在り、回教の中国歴史に於ける事情に關し、概略的な認識を与えねばならないので、遂に本書下巻の草稿を編してプリントとし、学生諸君と一緒に切磋したい。既に事終るに及んでは、趙振武先生の督促をうけ、ここに旧蔵の各原稿を合してこれを印刷に付し、有道の士の叱正を仰ぐ次第である。因つて顛末を記すことかくの如くである。

ムハメッド暦一三五四年、民国二十四年夏

北京成達師範学校に於いて

金吉堂誌す

例　　言

一、本書が直接採取した資料は約百種である。しかしてこれらは張亮丞氏の中西交通史料彙編、陳援菴氏の西域人華化攷、桑原鶴藏氏の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟、李思純氏の元史学等の書中で紹介されたものから得た。間接に採用したものもまた三、四十種を下らない。謹んでここに誌して感謝するものである。けだしそれぞの書は實に予に甚大の便利を与えたのである。

一、本書は王夢揚、尹伯清、趙振武三君の校閲を経た外に、下巻は全く現代の史家陳援菴氏の指示に従つて体裁を修正した。謹んで三君及び陳氏に対し最大の謝意を表する次第である。

一、本書は上下二巻に分つ。上巻は余個人の研究して得た所につき、この方面に努力している者にいささか門径を指示し、前進の困難を減少させようと意図したのである。因つて「中国回教史学」と名づけた。下巻は参考した各書から資料を蒐集して、一個の大体の雛形をえた叙述とした。故に「中国回教史略」と名づけた。

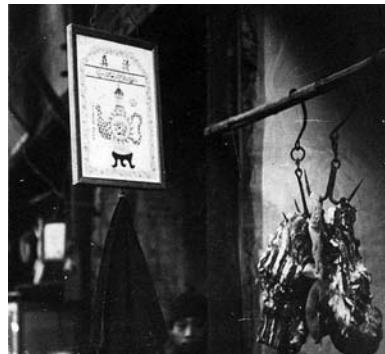
著者識す

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

上
卷

中国回教史学

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



第一章 中中国回教史上解決すべき諸問題

第一節 回回と回紹の区別

歴代回教のことと言う者は顧炎武の日知録から始め、つねに今日の回々は唐代の廻紹（がこう）の後裔であるとなし、大率、本教が廻紹人を通じてこの地に伝来し、廻紹の音が転じて回々となつたのであるというのは、鹿を指して馬となし、訛を以て訛を伝うるもので、実に中國回教史上の一大欠陥の存する所である。日知録卷二十九、吐蕃回紹の条に、

「唐の回紹は即ち今の回々これなり。唐書〔卷九五〕に回紹は一つに回鶻と名づく。元史に畏兀兒部あり。畏は即ち回、兀は即ち鶻なり。その回々と曰うはまた回鶻の転声なり。その畏吾兒と曰うは又畏兀兒の転声なり。唐の会昌中より、回紹衰弱し、幽州〔河北省〕を降す者前後三万余人。皆散じて諸道に隸す。始め中華に雜居し、しかしてその本俗を変えず。杜子美の留花門詩〔杜詩詳註卷七〕に『連雲左輔に屯、百里積雪を見る』李衛公、上尊号玉冊文に『種類磐互し、縞衣茶の如し。邪を挾み蟲をなし、宇内に浸淫す』と。今の遺風もまた未だ昔に異らざるなり。旧唐書〔卷十四〕憲宗紀、元和二年〔八〇七年〕正月庚子に『回紹、河南府、太原府に摩尼寺を置かんことを請う。これを許す』と。これ即ち今の礼拝寺の由つて立つる所なり。」

とある。顧氏は明清の大儒で百家に精通していたが、牽強付会をなし事實を誤解せることかくである。後來、康熙・雍正年間（一七二二年）の回教問の大師劉智も遂にまた説をなして曲解した。劉著、回回説に、

「しかしてこの地これを称して回々となす。そのいづれより起れるかを知らず。意げだし吾道の西より東せるためならん。隋唐に始り回紇国を経て来る。回紇はすなわち中国の邊訳にして、また天方の邊訳なり。天方の教を行う。教類相似たり。則ち以て吾人もまた回紇と称す。宋元に至り、天方の学人大いに至る。回紇の二字の謂れなきを視て改めて回回となす。声音相近くして義理すこぶる深し。沿うて今に至る、知らざるべからざるなり。」

（道古堂集、景教統考）や魏源（聖武記卷七甘肅再征叛回記）の流派は皆しかりとする。現代に至る迄、回族を恣に談ずることが漸く傾向となり、その敬典忘祖（典故を追数してその祖の職掌したところを忘れるの謂）の尤なるものである。考うるに今日の回々は、即ち古代の回紇ではないのである。このことは明史ではすでに間接に言及している。清の乾隆年間（一九三六年）、嘉定（四川省）の錢大昕氏は、直接にその非なるを指摘している。

明史卷三百三十二、西域伝に、

「默德那は回々の祖国なり。地は天方に近く、相伝うその国王謹罕謹德、生れながらにして神靈。ことごとく西域諸國を臣服す。諸国尊んで別詣拔爾〔Paighambar〕となす。なお天使と言うが如きなり。隋の開皇中、その国撒哈八・撒阿的斡葛思〔Saad Wakka's〕始めてその教を伝えて中国に入る。元の世に至つてその人四方に偏く、皆教を守りて替えず。」

錢大昕の二十二史考異（卷一〇〇）に、

「今回の回々は即ち古の回鶻と謂うは非なり。その元の畏兀は即ち回兀の転声と謂うは則ちこれなり。元時、畏兀兒もまた畏吾兒と称す。趙子昂撰趙國文定公碑に云う『回鶻は北庭の人、今謂う所の畏吾兒なり』。歐陽原功撰高昌偰氏家伝に云う『偉兀は回鶻の転声なり。その地もと和喇和林〔カラコルム Kara Korum〕に在り。今の和寧路なり。後徙りて北庭に居る。北庭とは今の別失八里城〔Bishi Bahq〕なり。たまたま高昌國徵なり。すなわち高昌を併取してこれを有つ。高昌は今の吟喇和緯〔Kara Xorâ〕なり。偉兀もまた畏兀の異文にして回鶻なり』と、趙歐二公これを言うこと詳なり。回々と回鶻とは実は一種にあらざるなり。元史太祖紀に『江罕・河西・回鶻、回々三国に走る』とあり、世祖紀に『軍官の格例を定擬す。河西、回回、畏吾兒等を以て各官品に依り万戸府の達魯花赤〔蒙古語 daruaci 長官の意〕に充つ』と。文宗紀に

『各道廉訪司官は、蒙古人二人、畏兀、河西、回々、漢人各一人を用う』と。薛塔刺海伝〔卷一五〕に『回々、欽察、河西、畏吾兒の諸国を征するに従う』と。明史〔卷三三九〕哈密伝に云う『その地種落雜居す。回々と曰い、畏吾兒と曰い、吟拉灰と曰い、相い統属せず』と。又云う『哈密はもと回々、畏兀児、哈刺灰を有す』と。則ち回々と回鶻とはもと区して以て別てり。』

錢氏の区別は妥当といえど妥当であるが、しかしながら詳細をつくして居ない。回々なる一名称の源流は如何、及び廻紇、回鶻、畏吾兒等の相互関係はまたどうであるかという点は実に甚だ簡略欠如しているのである。この点を見間に徴して後に縷述しよう。〔二十史考異の原文は右引用文と異同があるが、しばらく旧を存す。〕

A 回々なる名称の源流

「回々」なる名称は一体何れの時代の何れの文献に起源するものであろうか。以前の各家と、錢大昕以後は皆遼史に始見すると云う。同書卷三十、天祚本紀に、

「軍を尋思干〔Sanmarkand〕に駐むこと凡そ九十日。回々国王來たり降つて方物を貢ぐ。」

とある。耶律大石が西奔した時代を考えると、宋の徽宗宣和五年〔一一二五年〕である。余は夢溪筆談を読んで卷五に至ると、同書の作者が延州〔陝西省〕に知事であった時作つた凱歌五首があり、その第四に、

旗隊渾として錦繡の堆れるが如し、 銀裝背魄回々を打つ。

先ず安西路を淨掃せしめ、

まさに河源に向つて馬に飲い来たらんとす。

とあるが、沈括が延州に知事であった時代は、現在未だ何年何月であるか調査していない。だが宋史の本伝〔卷三三一沈溝伝付〕の文理から推測すると、遅くとも宋の哲宗の元祐元年〔一〇八六年〕以前——約三、四年——でなければならない。もし歌中に言う所の「回々を打つ」の回々が他種の解釈が無くして、これは一種の民族を指して言うものとすれば、回々なる名称の出現は、また早きこと三、四十年に上る。歴史上相当価値のある発見たることを失わぬとすれば、回々の名称は北宋の中葉には既に有つたことになる。南宋高宗紹興二十一年〔一一五一年〕洪遵が譜双五卷を作つてゐるが、第三

卷を回々双陸と曰う。金史に回々營というのがあり、その人は火薬の製造に善しとある。が、これ又回々なる名称は北宋以後に漸く通行したことを知る。チンギス・ハンが西域を西征した時、「回々」の名辞は更に確定した。当時の官私文書に頻見している。

「汪罕、河西、回鶻、回々の三国に走り、契丹に奔る。」（元史太祖本紀）。

「者必那演と罕勉力銷潭を征す。回々諸国、部曲万人を將て以て先んず。」（元史一百廿二、巴而求阿而忒的斤伝）
「……壬午、帝回々国を征す。その主滅里国を委して去る。速不台に命じてこれを追わしむ。」（元史卷一百二十一、速不台伝）

「兎の年（己卯、一二一九年）サルタグルの民の処に、アライ嶺を越えて出征したが、チンギス・ハガンは后妃を連れて出征し、弟達の中からはオッチギン・ノヤンを大老宮の留守に任命して出征した。ジェベを先鋒として遣した。ジェベの後援にスベゲデイを遣した。この三人を遣すのに、『外に往き、三人をスルタンの住む城外から繰り往かせ、他の民の攻略するを許さず、我軍の到る時を俟つて挟み撃ちせよ！』

と仰せられた。ジェベは往きてメリック王の諸城市を過ぎてその民を移動させず城外を過ぎた。

そのうしろからスベゲデイもそうした理由で民を移動させずして過ぎた。

そのうしろからトクチャルはメリック王（王ではなく酋長に過ぎず）の辺城を侵掠して、その田地を攻掠したのであつた。メリック王は諸城市を攻掠されたので叛き移動してジャラル・ディン・スルタンに合併した。」（小林高四郎訳『蒙古の秘史』二七七一八頁）

「サルタグルの民の処に七ヶ年出征して、そこでジャライル氏のバラを待つたが（実際待つたのは四年）、バラはシン河を渡つて、ジャラル・ディン・スルタンとメリック王の二人をヒンドス（インド）の土地に到るまで追撃して、この二人を失い、ヒンドスの中央に到るまで搜したが探し得ずして還り、ヒンドスの辺境の民を攻掠して多数の駱駝、多数の去勢した牡山羊を取つて來た。」（同書、二八五頁）。

本書はここに至つて一つの定義を下そうと思う。元初及びそれ以前に言う回々とは殆ど専らクホラズム [Khuxuzam] 国人を指して言つてゐるのである。すでにクホラズムを滅すに及んで、蒙古の疆域は日に拡大し、眼光はいよいよ広く、単にクホラズム人を呼んで回々というだけでなく、クホラズム人の生活が同じ人、換言すれば凡ゆるイスラーム教徒は皆回々と称せられた。故に元初以後の文献から考察するに、バグダッドのアバス朝最後の君主治下の人民をもまた回々と呼び、西域各方面から中国に來たイスラーム教徒を中国人は総称して回々といつた。且つ海上から来航したイスラーム教商賈はその生活習俗が西北から來た者と同じであつたので、中国人は別にこれを呼んで南蕃回々と言つた。要するにこれから後は回々なる名称は中国に於てはイスラーム教徒の代名詞となつたのである。

「八年戊午の春、諸王旭烈兀、回々哈里發を討つてこれを平らぐ。」（元史卷三、憲宗本紀）

「今回々は皆中原を以て家となし、江南尤も多し。」（周密、癸辛雜識続集上）

これは凡て回々が中央アジア及び西アジアから來たイスラーム教徒を指して言つてゐるのであつて、それがペルシャであろうが、アラビヤであろうが或いはトルコの国籍であるが、區別していないのである。

「阿老瓦丁は回々氏。西域茂法里の人なり。至元八年〔一二七年〕、世祖使を遣して礮匠を宗王阿不哥に徵す。……馳騁して京師に至る。」（元史卷二百三、工芸伝）

「亦思馬因は回々氏、西域実刺の人なり。善く礮を造る。」（同上）

茂法里、実刺というのは皆西アジアの地名である。回々という名称は始めは地を代表し、ここに至つてすでに人を代表するようになつた。

「泉州に巨賈南蕃回々仏蓮なる者あり。蒲氏の婿なり。その家富甚し。……」（癸辛雜識続集卷下）

回々が教の字と聯つて一語となるに至つたのは明以後の事実である。明初に馬歛なる者があり、かつて鄭和に隨行して西洋に赴き、海外を巡行して『瀛涯勝覽』と曰う一游記を著した。回々教という一名称はその書中に始めて見える。「榜葛剌は地廣く人稠く、財物丰碩。城郭あり。すなわち回々人なり。王及び將領の冠服は回々の制を用う。婚喪皆回々教なり。祖々兒人皆回々教を崇ぶ。……婚喪・回々教に遵う。」

上述を総合して一観表を作り回々なる名称の沿革をみると次の如くである。

地を表す 人を表す 教を表す 簡称 現在

回回地

回回氏

回教

回教・回回・回民

回教民族

元朝が既にイスラーム教徒を目して回々となしたことはすでに大体如上の通りである。しかしながら多方面からこれを考察するに、時には又回々を以て回紇かいきつとし、回鶻かいこうとし、且つキリスト教別派のウイグルを呼んで、回々となすこともあつた。次に例証しよう。

「回々を回紇かいきつとなす。」

「……算端スルタンの未だ敗れざるに方りてや、城中常に十万余戸。國破れて來たり、存する者四の一、その中大率、回紇多し……。」（長春真人『西游記』邪米思干の有様を叙する条）

邪米思干というのは即ちサマルカンド（Samarkand）であつて、即ちクホラズムの首都である。元初にあつては初めクホラズムを呼んで回々といったのは、凡ゆる官文書や私人の著述の多くの慣習である。さればこれは回々を回紇と呼んだ一例である。

「阿合馬アハマドは回紇人なり。その由つて進むる所を知らず。世祖の時、累官して中書平章政事に至る。その子呼遜フサン、大都路總管兼大興府尹となる。」（元史卷二〇五奸臣阿合馬伝）

阿合馬（Ahmed）の名とその子の名呼遜（Husain）とは一見してイスラーム教徒たること疑いないのであるが、且つラシド・ウッジインの『年代紀彙集』に明記し、元史では回紇と謂つてるのである。

「……その回紇国は……種類甚だ衆し。その鬚鬚拳毛の如くして縑黃。浅深一ならず。面はただ眼鼻のみを見る。その嗜好もまた異なる。没速魯蛮ムスルマン回紇なる者あり、性残忍。肉は交手して殺し食う。斎といえども、また酒脯して自若たり。遺里諸回紇なる者あり。すこぶる柔懦、殺を喜ばず、斎に遇えば則ち肉食せず。印都回紇なる者あり。色黒くして性慾、その余はことごとく記すべからず。」（烏古孫仲端『北使記』）

張亮丞氏は右の節文に註して曰うには「鬚鬚拳毛の如くにして縑黃、浅深一ならず、面はただ眼鼻を見る」とあるの

は正にペルシャ人の様子に合する。ペルシャ人は今日に至るも好んで鳳仙花を搗いたその汁で鬚を染めるが、まず最初に黄色くし、ついで青い染料を用いると、みな黒色に変ずることが出来る。大多数の者は皆橙黄色の鬚を喜ぶ。ペルシヤ、トルコ等の回教国の婦人は今日に至るも紗「チャードヒ」で面を掩い、ただ両眼だけを露しているが、ペルシャの回教徒は今に至るも肉を食うにフォーク、ナイフを使用せず、手で撕いて食するのである。遺里は哈烈ハルの別名である。印度はインドである。(著者思うに今日の白ロシヤ人にしてイスラームを信奉する者も酗酒を忌むことなく、右の斎といえども酒脯し自若たりと云うのは、虚構のことと見るをえないものである)。

回々を回紇とす——回々と回鶻と互用する。

「庚辰冬大いに雷す。上以て公に問う。公曰く、スルタン棱里檀まさに中野に死すべしと。すでにして果してしかりき。梭里

檀は回鶻王の称なり。(蘇天爵 国朝文類卷五七、中書令耶律公神道碑)

「阿刺瓦而思アラワルス」は回鶻八瓦爾氏ハワルなり、帝親征に従い、軍に没す。子阿刺瓦丁アラワティン、世祖の北征に従いて功有り。子瞻思丁、子五人あり。長は烏馬兒ウマル。次は不別、次は忻都、次は阿合馬、次は阿教。不別は驍勇にして騎射を善くす。成宗武宗に歴事し、積官して榮祿大夫「となり」三珠虎珠「を佩ぶ」。子斡都蠻職オトバンを襲ぐ。」

ウイグルを回々となす。

「回々に行く者は則ち回回字を用う。鎮海これを主る。回回字は只二十一個の字母あるのみ。余はただ偏旁につき上湊して行をなす。

又兩次、金帳中に葡萄酒を造る。盛るに玻璃瓶を以てす。一瓶にして十余の小盞を得べし。その色南方の柿漆の如し。味甚だ甜し。聞くならく、多飲すればまた酔うと。ただ多く得るに縁なきのみ。回回国貢來す。」(宋彭大雅黒韃事略) 鎮海はウイグル人である。二十一個の字といふのはウイグル文字である。葡萄酒はトルルファンから出るが、ウイグルの産でもある。ここでは回々と云つてるのである。

以前の事實を觀察するに元初では官私の文書上、回鶻・回紇と回々とはかつて互いに通じて用い、ほとんど一般にイスラーム教を信奉する民族を指して言つたので、ウイグルなる音に至つては、回紇或いは回鶻の音から転化したもので

SAMPLE
Shooshi-Suisen

あるが、実際から観ればその国人が信奉する宗教はイスラーム教ではない。その源流と詳細なる事情については後に言及するが、『黒韓事略』の中で言っている回々は畏兀兒ワウイールを指しているが、それは例外に過ぎない。

B 回紇と回鶻、畏兀兒との関係

廻紇は先祖匈奴の後裔である。後魏の時鉄勒と号し、隋の大業後は廻紇と称した。薛延陀と共に吐厥の北辺を攻め、声威、北方に震うたが、牙庭を独樂河畔に樹て（新唐書）、唐の天宝年間（七五四年）安禄山が禁闕を犯し、唐朝を接けて賊を討伐するの功あり、累ねて公主を娶り、自ら天驕と称し、大いに唐朝の患いとなつた（五代史）。元和四年〔八〇九年〕讐德曷里祿没羽施合密毘伽可汗（はやかさ）が使を遣して改めて廻鶻とした。意味は廻旋軽捷なること鶻の如きに取つたのである。開成〔八三六—八四〇〕の初年、その部内が乱れたが……將軍に句錄未賀なるものあり、走つてキルギスを引率し、十万騎を領して廻鶻城を破り、ほとんど燒蕩し尽して了つた。廻鶻は諸蕃に散り散りに出奔した。廻鶻駿職という者があつた。外甥の龐特勒と子の鹿井遐粉ら兄弟五人十五部を擁し、西力邁邏祿に奔り、一支は吐蕃に投じ、一支は安西に投じた。また可汗の牙庭に近き十二部は南下して、漢に降附した。会昌二年〔八四二年〕冬、三百の衆が相次いで幽州〔北京市外城西部より城外に亘る〕に降服し、詔して諸道に配属した（旧唐書）。この時吐蕃はすでに河西隴右を陥れて回鶻を方々に処らしめた。五代の際に当つては、甘州〔甘肃省張掖県〕西州〔新疆省哈密県西七百里〕に居る者があつたことは中國に見えている（新五代史）。故に甘州には可汗王あり、西州には克韓王があつた。新復州には黒韓王があつたが、皆それらの後裔である。宣和〔一一九一—一二四年〕年間に入貢したので、散じて陝西の諸州に之き、滞留久しいこと帰らなかつた（宋史）。龐特勒は自ら可汗を称し、磧西の諸城を有ちその後嗣は君主弱くして臣強く、甘州に居つても昔日の盛がなかつた（旧唐書卷一九五）。

「甘州回鶻、回鶻、阿薩蘭回鶻、沙州回鶻、和州回鶻。」（遼史卷三十六、兵衛志、屬國軍条）

「甘沙州回鶻……西州回鶻……合羅川回鶻……秦州回鶻。」（宋史卷四百九十、外国伝、回鶻条）

「景祐三年〔一〇三六年〕、再び兵を挙げて回紇の瓜、沙、蘭三州を攻め、ことごとく河南の故地を取る。」（清張鑑春撰

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

傳統先著
中国回教史

井東憲訳

SAMPLE
Shoishi-Chin-ji.com



自序

三年以前のこと著者と親友王義、魯忠翔両君とは中国回教の文化や思想の発展の必要を深く覺り、共同にて具体的の方法を商議し、即ち下に列する各項の主張の宣言を作った。

(1) 巡回編輯の方法を以て回教經典を整理し並びに新解釈を加え、その發展の為に一種の精密なる理論系統を作ること。

(2) 世界思潮を紹介し教徒をして現代思想の趨勢を明瞭にせしめ且つ歴代の各大思想家の平生及びその理論を認識せしめ以て宗教問題研究の参考となすこと。

(3) 回教精神を一切の社会事業に貫徹する為、宗教家はその眼光を宗教の範囲の内に閉じこめることなく、常に整然たる社会の中に関与すべきものたること。

(4) 中国回教徒は中国の国民なれば、中国人は自ら中国の風俗礼節を有すれば、この種の風俗礼節にして教規に違反せぬものの如きは則ち中国回教徒はその國俗に従応すべきなり。吾人はアラビア或はペルシャ風俗に中国風俗を交代する事を願わぬ者なるも、但し真正の回教精神に中国原有の不合理なる俗習を改善なす事は願うところなり。

(5) 中国回教の有志青年に最新の知識を注輸する為、最も有効なる教育方法を以て将来の回教徒を領導なす師範の資を造成すること。

(6) 全国の回教團体を統一し、整然たる回教經濟の具体計画を制定なして、中国一切の回教社会の文化事業の發展を補助すること。

(7) 宗教家はまさに科学精神に富む者なるが、いわゆる科学精神は即ち固執の心を免れ、寛容の態度を保持する事を以て、一切の合理の見解を接受す。回教もまさに科学的人材を培養し、これを以て一切の宗教事業の基礎を發展せしむべし。

(8) 優美なる文芸を以て宗教の情緒を補助せしむること。

これをおこなうに、吾々は真善美三方面に於て中国回教の文化思想の發揚を欲するのであるが、ただ當時にあつては少數の有識の士はこれを認めて当然の急務となすが、しかし時機が尚早の為に、未だ一般の教友の同情を得られず、ついに事業と願望とは違うに至り、努力する事が出来なかつたのである。が、想わざりき、三年後の今日となると、教外の学者顧頡剛先生の如き、教内の学者白寿彝先生等の如きは前後して中国回教の文化事業を請求し出したのであつた。顧先生は中國回教文化運動がすでに一つの新段階に至つた事を認めめたが、この新段階はただ下に列記する四点に包括されるのである。

(一) 回教の根本教義及び重要教法に対し、すべからく理論上の開発が有るべきこと。

(二) 凡そ回教の歴史上アラビア文化与中国文化の融合に関しては回教徒と非回教は真正には種族の区別の無き事に、すべからく事實の説明を与うべきであつて、教の外内の人土をして均しく普遍の認識を有らしむべきこと。

(三) すべからく大量にして精細の翻訳及び回文典籍の整理をなし、中国学術界に一つの新鮮なる刺戟を与うべきこと。

(四) 西アジア諸回教国家に対し密切なる聯絡及び切実の瞭解を有らしめ、その彼此文化の関係をして成さしめ、我國西城国防の重要因素を保持せしむ。

顧先生は又回教にあつてはこの種の過程中に三種の欠陥のある事を指摘した。

(A) 各方面的努力の集中せざること——小型刊行物の如きは多しといえども、しかし一つとして規模の比較的大にして、人力財力の比較的厚く、内容の比較的充実したる雑誌は無い。各地の回教小学には一つの集中された統屬機關や高級学の共同研究の組織が無い。

(B) 各種活動の現代性の欠乏——回教徒発表の文字と言論中、學術研究と宗教情緒は毎に拘混を一緒になし易く、高級學校の課程の編成と将来の計画中に列する處の課業にありては未だ世界知識の領域中に同化出来ぬ。

(C) 回教三十年の文化運動以来なお精細にして具体的な理論系統が無く、又未だかつて優秀なる文學家を培養して出し、教義の広大な宣揚をせしめた事もない。

上述のいわゆる中国回教文化にはまさに四大特点があるのであつて、それは即ち著者と數名の同志が三年前に夢の中で求めたところのものである。又いわゆる三大欠点は、また即ち吾々が早く奮起を欲して補足したものであるが、しかし事實が吾々に与えた教訓は、この願望はすこぶる短時間で実現し得るところのものではなく、また少數の有識の回教徒の力で出来るものでもないという事であつた。誠に白寿彝先生の云う所の如く、吾等開明沈思の回教徒と回教文化を認識する非回教学者とはまさに聯合し、政府の補助支持の下に在つて一つの回教文化研究機関を設立し、以てこの運動を推動しなければならぬ。しかし私の知るところでは、その尤も重要なものは即ち全国一般の回教同胞の同情と贊助を獲得し、この理想をして順調なる実現を得さしめるにあると思うのである。

本年二月中旬商務印書館の王雲五先生は「中國文化史叢書」の編輯の仕事をするに當つて、私に『中国回教史』の一書を依嘱せられた。が、私は著作に専ら長せず、また卒爾の操觚も敢えて出来ぬので、すなわち哈徳成阿衡と沙善余先生に相談した。ところが二氏は共に商務印書館が中国回教を重要視している事を欣幸となして、私がこの仕事に任ずることを努めて促し、並びに材料を充分に供給せられ、校訂を担任せられた。

私もまた數年發展して來た中国回教文化の素志を貫徹しようと計り、毅然としてこの書を草成したのであるが、それは諸君子の提唱の後に從い、回教文化の理想の振興に対し、一つの具体的表現の發端を作り、全國の教友がその成功に努められん事を願つたのである。

本書は全く客觀的態度を以て正史を根拠とし且つ頼るべき材料は時代順に編成した。任務に就いてその事は論じたが批判は加えなかつた。が、只その間になお数点だけ特別に声明すべきものがある。(一) 中国回教徒の人数に関しては確実なる統計が無く、或いは七千万と謂い、或いは五千万といい、或いは一千余万と言われているが、しかし均しく確

実な根拠はないのである。本書の採用したものは、本年度の『中国年鑑』の所載で明らかにされたものであつて、これは比較的に詳細の数字であると思われるが、将来正確な調査を得た後には修正を与える。(二) 全国の清真寺の調査は、北京の旬刊『月華』にすでに詳細なる統計があるが、惜しまらくはなお未だ完備してをおらぬから、本書の根拠としたところのものも、また『中国年鑑』より採つたが、しかしこれを『月華』の調査の結果と比較するとすこぶる出入が多く、なお人をしてその確数を知り難からしめている。(三) 現代回教中の有名な軍人馬福祥、白崇禧、馬麟等、学者の哈馨、金世和、馬鄰翼等の如きは、共に知名の士であるから、本統に立伝をなすにはその國家宗教に対する貢献を詳述しなければならぬが、篇幅に限りあることとて如何とも出来ず未だ論及出来なかつた。

日本人桑原隠藏の『蒲寿庚考』、新会の陳援菴の『元、西域人華化攷』、通県の金吉堂の『中国回教史研究』は、均しぐく本書に少ながらぬ暗示と参考を与えて呉れたが、未だ文中に於て一々註明出来なかつたから、ここに、統て三先生に向い深く謝意を致すものである。又馬承亭、薛子明両阿衡、蔣蘇盦、馬醒東、王義の三先生は材料を供給して下され、なお國立暨南大学、上海、聖約翰大学に珍貴なる参考を惠借したこととは共に感謝の至りである。

哈德成教長、沙善余先生が盛暑の中で原稿の審訂を代つてなして下され、並びに各種の意見を与えて下さつた事を、特にここに声明して謹んで謝忱申す次第である。

中華民国二十六年七月一日

語梅簃にて 統先識

SAMPLE
Shoshi-Shinsai.com

第二章 回教の中国伝入

一 回教入中の年代

回教は何時中国に伝入したかに就いては、諸説が紛糾としているが、しかしながら確実な解決はついていないのである。民国以前の回教学者は、この問題に対し切実なる考察がないから神話的附会に非ずんば年代を誤算し、即ち他人の説に盲従して、任意に結びつけたのである。

近來一般の学者はこの問題に対しすでに考究の事業をやりはじめているが、しかし諸説が紛糾とするばかりで歸一するところがない。

年代の誤算に由つて絶対に錯誤しているものは、即ち「隋の開皇年間」(六〇〇年)という説である。この時代にはマホメットはなお少年時代であつて、イスラムもまた正式に成立していないからして、中国に伝入する道理はないのである。これを要するに凡ての、マホメットがメジナに遷都する以前に、中国に伝入したという説は、皆な信ずべからざるものである。

ここに西暦と中国との年代を明瞭に計つて見るが、特に各重要の年号を並べ配列し、以て対照して見ると下の如くである。

西暦五七一 陳、宣帝太建二年

マホメット誕生

西暦六一〇	隋、煬帝大業六年	マホメット聖なることを宣佈す
西暦六二二	唐、高祖武德五年	メジナに遷都す
西暦六二八	唐、太宗貞觀二年	遷都第七年
西暦六三三	唐、太宗貞觀六年	マホメット卒す
西暦六五一	唐、高宗永徽二年	回教中国に伝入す
		二年説となし、一つを永徽二年の説となす。
		前者は『回回原来』に始めて出ているもので、教徒金吉堂君の考証であり、後者は『旧唐書本紀』及び『冊府元龜』に見えるもので、近代人陳垣及びアメリカ人メーリンの証明するところである。
		前者は回教徒の得た結論であるが、後者は回教徒に非ざる者の探究検討の結果である。
		ここにその理由を説明すれば次の如くである。
<p>(一) 貞觀二年の説　『回回原来』の所載に拠る。</p> <p>「大唐の貞觀二年、唐王は夜一纏頭人の妖怪を追いて官殿に入るを夢見る。翌日の早朝臣下は奏して曰く、『纏頭<small>と</small>は本これ西域の回なり。臣は回は誠実にして欺かず、忠淳にして偽らず、恩を以てこれを結べば、必ず服悦すと聞く。更に吾皇使臣を差わし、進んで回王に見え、使を遣して中華に来たり以て我国に庄<small>まちづか</small>ん事を請求せん事を乞う。』天子は奏を聞き、すなわち使を遣わし聘請す。……回王は該思、吳哀思、喝辛の三人を遣わして中国に投じて奔らしむ。行き中途に至るに、カイシ、ウアイシ水土に服さずして亡し、余のケーシン一人中中國<small>（中國）</small>に至る。唐王は三千の唐兵を選びて移りて西域に至り、更に三千の回兵を換えて中国に來たり、生育無窮なれば、中国にすなわち回有るなり。」この書は怪誕無稽にして、史家の取り上げるところとなるには至らぬし、しかも陳垣氏は又この書が年代を誤算しているといつてゐる。</p>		

金吉堂君の著『中国回教史研究』の一書は別に新しい証拠があるが故に、この説の主張につとめているのである。この説の特徴は、即ち回教の中国伝入はマホメットの在世の時であるということである。金君はその理由は三つありとして列挙している。

(甲) ウエルズ著『世界史綱』第三十章末の一節にかつて六二八年、マホメットは唐の太宗に書を致し、その回教の信奉をすすめ、並びに遣使中国に来る。唐の太宗はすこぶるこれを礼遇し、並びにこれを扶けて真清寺を広東に建つと云っている。金君はこれはウエルズがひたすらにマホメットの神聖なる人格を穢した位のものであつて、しかも回教のこの種の光榮の事跡は、その口から出たものであることは、遂に深く信すべきことに疑いのないところであると認めている。

(乙) 金君はかつて王静斎布教会主のアラビア文の『百科全書』の一段の引用記録を見て、回教の入中は六二八年(貞觀二年)であるという事を証するに足るとしている。その原文は下の如くである。

「聖マホメットのメッカよりメジナに遷居したる時にあたり、つどいし賢者中に一命の蘭哈布(ラハブ)
(ラルシオ)（咏爾赦の子）なるもの中国に赴く。ここに於てつぶさに辛苦を嘗め、中国に到達す。久しく中国の言語を習い、並びにその風俗に染まり、ここに於てかイスラムを東土に伝播したれば、その事日々に益々拡張し、大多数の人々に信仰をなさしむに至る。六百二十八年唐□□（切音不明）に見るに、すこぶる優遇を蒙る。蘭君寿を享くること極めて長く、その歿後中国人はこれが為、碑を立て功德を記し、以て永久に垂る。」

(丙) 金君は西暦六二八年を以てマホメットが既に書をローマ、ペルシヤの二帝に致したとし、加うるにマホメットはかつて「求学は遠しといえども中国に在り」の請を言うたからして、即ち當時必ずやすなわち書を唐の太宗に致すは自ら意中のことならんと思つたのである。

これを総合して観るのに、金君の挙げた三大理由は、この間を分析して四点となすことが出来る。

(一) 凡そ反対者の言うところの「好話」(よいはなし)は、必ず均しく「真話」である。(二) マホメットは西暦六二八年にかつて各国に使者を遣わしイスラム教の信奉を勧めた。(三) 遣わされて中国に至った使者は、マホメットの母方の伯父では

ないらしいが、それは必ずマ氏と同時代の人である。（四）アラビアの『百科全書』に信憑している事。

しかし実際は、この四点にはどれにも均しく極めて疑うべき処がある。ここにそれを分けて論すれば下の如くである。

(A) 自分の所説の好話に反対するものは即ち真話であるというような事は不確かなことであつて、これは明らかに弁ずる事の出来ぬものである。ウエルズが『世界史綱』を著した時は、まさにこの一年に対して詳細なる考究をなすの暇が無かつたのであつて、けだしウエルズ氏もまた当時の回教を討論した歐洲の書籍を根拠としたに外ならないのである。筆者の知るところに依れば、フランス人 De Thiersant の著わした *Le Mahométisme en Chine* は、中国の回教の叙述についてすこぶる盛名を負つた欧文の書籍である。

この書の所載に依れば、即ちマホメットは西暦六二八年にかつてその母の伯父 Wahb-Abu-Kabuba を遣使として海路に由つて中国に至らしめ、唐の皇帝に向ひ回教を宣揚すると共に礼物等を進呈したという言葉がある。

但しこの中国に來た人は、該著の著者が自分の推想に依つて声明したところのものである。

該書には又六二八年をマホメットの「伝教の年」となしているからして、マ氏はまた即ち中国に人を派遣したといつている。

しかしウエルズとテイルソンの二人の言うところの是非を信じるに足るまでは、なおすべからく事實の証明を待たなければ、発言の人さえもその眞偽は定められぬのである。

(B) マホメットがかつて各国に回教宣揚の遣使をなしたという一事は千万確かでこれは眞実である。ただアラビアの史家が何を以て一人もマホメットが中国に遣使を赴かしめたということを提唱するものがないのであろうかと、この一点が疑問である。

金君はこのことを或いはマ氏が数十年後にそれを再び弟子に伝えたからして、記載に遗漏し、しかもそれ以後の修史編史の人も又未だ必ずしもマホメットが世界に対する知識が在ったとは思わなかつたので、すなわちこの点を疎略にして載せなかつたものと認めている。

しかし回教は最も早い歴史家 Ibn Jshak の如きは、かつてマホメットの遣使にして他国の帝王に至つたものは凡てで

九ヶ国の多くがあると詳述している。何を以て独りこの遠大の出使を遣して論ぜざるや？ 且つ私の知るところに依ると、マホメットは他国の帝王に均しく書を致したが、それには「アラーの使者マホメット」なる図記（印章）がある。故に当時にあつてはマ氏の他国への遣使は極めて重要な事務であつた事は想像しても知ることであるが、どうしてその弟子に対し中国に派使の事が一字も未だ書かれていないのであるう？ 何ぞ怪事ではあるまいか。西暦六三一年にマホメットはまた他国に遣使したことは、Wakhiy の秘書にその派遣の事件と聖諭の内容に対して均しく詳述しているが、但しました中国に遣使したことは未だ言及していない。故にマホメットの在世の時は親しく自ら中国に遣使して回教を宣揚したものであろうが、私達には今日に到るもなお確実なる信憑がないのである。

(C) 一次二次に回教徒が中国に来たかどうか、それがマホメットと同時代であつたかどうかについての根本問題もまた証明する方法がないのである。

マホメットの母の伯父中には Wahb·Abu-Kabuha と名乗るところのものは居なかつた。

又中国の通俗的聖者伝の如きは、母の伯父の幹葛思 (Wakkas) を中国に至つた第一人者となしてゐるが、ただアラビアの中には幹葛思がアラビアを一步も離れなかつたということには未だ言及していない。

その事は一生マ氏に追随したからして、中国には出使を致していない。
広州の懷聖寺及び「幹葛思の墓」もまた九世紀以後の產物に関するものであつて、世界漫遊家の伊賓 (イブン) ワ哈伯 (ワハブ) は西暦八七八年に広州に至つたが、なお未だこの寺院と塔墓の事には言及していない。故にこの点に関してもまた人をして信じさせすの方法がないのである。

(D) 最後の、アラビア文の『百科全書』所述の一節に関しては、未だその原文の如何も知られず、また何人の所作ともはつきりせぬのである。

ただわざかに王靜齋布教師の訳文について論するも、また回教が六二八年に中国に伝入したことを見証する事は出来ぬのである。

金君はこれを多方面から弁護しているが、訳文の語句を勝手に顛倒して、その本来の主張の根拠となしている。

金君の云うところは「文中『久しくこれ中国の言語を習い……その事業は日々に益々拡張す』等の語は、まさに唐□に謁見の句の後に移すべきものであつて『大多数の人が信仰するところとなす』の一句は恐らくは衍文に係り……」の如くであるが、私はそれがどこに根拠があつてその字句の順序を移置し或いは刪改したかを知らぬのである。

本来の訳文に照してこれを言えば、蘭哈布は六二八年にはじめて唐王にまみえたが、但し謁見の前にあってこの人は必ずや中国に来ることすでに久しく、中国の言語を学習したことに因り、且つ大多数の信仰を得たのであるからして、即ちこれは数年或いは甚だしきに至っては十年以上を費したのである。それにメジナより中国に到達するには又一年の久しう日月を要するのである。だからこの人物は必ずや六二八年以前にあって、若干年間すでに深く回教を信仰してメジナを離れて中国に来たつたものであろう。

但し実際の上にあつては六二八年の前の数年はマ氏がメッカから、メジナへ移つて來た時から、一切の基礎は未だ安定せず、従つて中国へ遣使が来る可能性は無かつたのである。

一步を進めてこれを言えば、これはかの『百科全書』から引かれた言葉を以て証明しようとした事はすこぶる信ずるに足らぬのである。

以上の諸点は何れもみな信すべからざるもののみであつて、回教が貞觀二年に中国に伝入したという説は根拠が無いのである。

(1) 永徽二年の説 この説は元来中国の正史である。『旧唐書、玄宗本紀』の永徽二年中に「乙丑八月大食タシフク国始めて使を遣わし朝貢す」の一条が有る。

陳垣氏はその著『回教入中国史略』の一文にあつてすこぶる詳細に述べている。ここに略記すれば下の如くである。「中國回教書中一部の極めて鄙俗にしてしかも極く遍行している書が有る。その名を『回回原来』と曰う。又の名を『西來宗譜』とも曰う。それは回教の東土に入るの始めを言うものにして、その始めは貞觀よりと謂う。識者の多くはこの書を鄙俗にして信ずるに足らずとなす。しかしその説の由來を一考すれば、また年数の誤算に由るも、作意有りて

偽したるものに比すべきに非ず。いわゆる貞觀二年は実は永徽二年なり。『旧唐書本紀』及び『冊府元龜』は均しく永徽二年、大食はじめて遣使朝貢すと謂う。何を以てその始めるか？唐代の外来の使者に向いては釣魚の制有りて、雌雄各一にその国名を銘して彼國に置くと『唐会要』に見ゆ。その初次の通使にはまさにこれなし、故にその始めて来るとなすを知る。貞觀二年と永徽二年との差は適に二十三年なれば、その説はもと謬ならざるも、特に誤算せしのみ。『旧唐書・大食伝』には又永徽二年大食の使来ると謂うも、國三十四年ありてより、すでに三主を曆す。今永徽二年を回暦三十年より三十一年に至るとなすと考案なれば、三十四年の説と合わず。『旧唐本紀』及び『冊府元龜』に拠れば、即ち永徽六年再び朝貢すとなり、『大食伝』はけだし永徽六年に使者すの言を誤りて永徽二年に使者すとなしたるなり。永徽六年は回暦三十四年ないし三十五年となせば、正に回教第三代哈里發（回教主）カリフ 奧自賈オマーンの在世の時なり。拙著に『中回暦対照表』及び『歴代哈里發世系年表』があれば参考とすべし。これを要するに、大食と中国の正式通使は唐の永徽二年より始るものなり。」

なお永徽二年説を主張する者に中国に二十餘年仮居したクリスチヤンの梅釜盛（Isaac Mason）がある。

メーリン氏は一九二九年「回教入中国考」の一文を書き、上海の亞洲文会の学報上に載せ、また回教の中国に入りたるはまさに西暦六五一年（即ち永徽一年）なりと言つている。

但し当時は東西の交通すこぶる盛んなれば、商人にして或いはイスラム教を六五一年すでに信奉した者がいたろうが、彼らが中国に至ったことは未だ知る由がない。しかしこの種類の回教徒は絶対に未だ回教の宣揚に來たのではないから、多くは回教を提倡するには至らなかつたのである。即ち回教は六五一年以前にあつては中国となお未だ関係を発生しなかつたのである。

故に回教と中国の正式に關係の發生したのは唐の高宗の永徽二年にあたり、西暦六五一年であつて、マホメットの遷都第三十年であつたのである。

二 回教の中国に入りし経路

漢の張騫が西域に使してより後、中国と西域との陸地の交通は一時すこぶる盛大を極めた。三国以後は歴代西域各国とまた時に相往来した。

唐室が勃興してからは交通の盛大さはペルシャにまで及んだ。

その時涼州は河西の都会であったが、その土地は西番に近かつた。ここは葱領以外の諸国の商人僧侶の往来が絶えなかつた。

唐は天山南路を取り、突厥(トルコ)を平げた後は、中国と西域との商売人は更に絡繹として途を行き、通行は阻まれなかつた。その経たところの経路は、地中海東岸の安第阿克港(Antioch)より出発し、ペルシャを通り、中アジア、天山南路を経て、長安に達したのである。

長安城内外の商戸は多く四千余戸にまで至り、しかして尤もペルシャ、アラビア人が商業を牛耳つていたのである。

唐代には互市監を特置し外国貿易事務を掌理せしめて関稅を徵収した。しかし唐の玄宗の時二つの勅令を下し、互市を禁止した。その一は開元二年(四七)となし、その二は天宝二年(五九)であつて、西域との經濟的絶交を実行し、交通を封鎖したので、ここに於て中国と西域との陸地の往来は漸く絶えたのである。

回教徒と中国人の經濟上の往来を除く外、唐時代にあつてはまたかつて陸地方面にあつては軍事上の關係に由り相互に接触した。

回教はマホメットがメジナに遷都してより勢力が日々に拡張し、数年ならずしてアラビア全部は皆すでにイスラムを信奉した。

六三二年にマホメットが世を去つて後は、阿布伯克(AbuBekr)に由り繼位せられ、哈里發(Caliph)となつた。阿布伯克は即ち東にペルシヤを討ち、西にローマを征し、國勢大いに振つた。

後又各カリフの外国に向つての拡充を経、前後に涉りペルシャを滅ぼし、サマルカンドを克服し、康国を侵した。（註
——康国も同じくサマルカンドである。中国語では、撤馬尼罕と書く。）

ここに於てかアラビヤの版図の内には、本と唐に属した州府を併有し、阿母河、錫爾河の各部族に沿い西印各地に及んだ。

天宝九年（西七五〇）高仙芝は石国（タシュケンド）王が藩臣の礼をなさぬ事を彈劾し、兵を請うてこれを討つた。十二月石国王は来降の約を詐つたので、京師にてこれを斬り犠牲とした。そしてその國中から奪取した名馬宝石はすこぶる夥しかつた。為に石国人は大いに悲しみ、隣国人は共に甚だ憤慨した。

そこでタシュケンド王子は即ち兵を大食に乞つた。時に大食（サラセン）はアバス（アバース）朝であつて、ついに九ヶ国^ノの兵を合し、四鎮を追撃攻征した。

ところが高仙芝は領地の兵三万を以て、七百余里の深きに入りて、怛邏斯城^{タロス}に至つた。ここに於て大食兵と相対峙すること五日間であつた。が、その後、唐の將軍万籬禄の二軍が内叛したことに依つて、大食と裏切り唐兵との夾撃を受けた。

この為高仙芝は大敗し、兵士の生存者は数千人に過ぎなかつた。そこで、中国と大食とはついに対立の形勢となつた。その後両国は妥協し、相互に使節を通じた。しかし、天宝十四年安禄山の暴動が起り、連続して両京が陥落し、広平王は朔方、安西、廻紇、南蛮、大食の民兵二十万を統率して、東上して安禄山を討伐した。この時、吐番（今のチベット）もまた辺疆の防備の空虚な隙に乘じて辺境に侵入した。

この形勢を見た李泌は大食と結んでこれに抗せん事を主張した。即ち上言して曰く「大食は西域に在りて最強となし、葱領^{バミール}より西海（地中海）に尽き、地は天下を半ばするに幾し、故にその結ぶべきを知るべし」と。

代宗の广徳元年（西七六三）隴右は全く吐蕃の所有するところとなつたので、吐蕃はその後勝ちに乗じて長安に侵入したが、郭子儀に擊退されてしまった。爾後中京と西域との交通の道路は隔絶し音信不通となつて了つた。

唐代の回教徒は陸地に依つて中国に入り先ず商賈の便宜を得たが、後には軍事の利を藉りたので、ここに於て日増に